

Robin の知ったこと

——“My Kinsman, Major Molineux” に示された二面的価値観 ——

鈴 木 繁

What Robin Knew : Double-Faced Values in “My Kinsman, Major Molineux”

Shigeru SUZUKI

Nathaniel Hawthorne の “My Kinsman, Major Molineux” は、彼の数ある優れた短編小説の中でも、特に高く位置づけられている。だが、当初の評判は必ずしも芳しくなく、ようやく1951年に至って、Q. D. Leavis の論文により、再評価の機運が決定づけられた。¹ 爾来、数多くの評者により種々論じられ、既に批評し尽くされた感さえある。それを改めてここで論じることは、屋上屋を架するとき印象を免れまい。しかし、これほどに様々な角度から検討を加えられていながら、この作品の本質に関わる従来の議論には、意外なほど大きな穴がぽっかりと空いているような気がしてならない。

“My Kinsman, Major Molineux” に対するこれまでの批評を概観してみると、その解釈には大きく分けて三つの方向性が認められる。一つには、歴史的解釈(historical interpretation)と言われるもので、この解釈によれば、Robin は若きアメリカを、Major Molineux はアメリカ植民地を支配するイギリス本国を表し、Molineux が民衆により追放され、Robin がその影響力から解放されることは、すなわちアメリカのイギリスからの独立を象徴している。歴史的解釈は Q. D. Leavis をもって嚆矢とし、それに続く Roy Harvey Pearce, John Russell, Julian Smith, Robert C. Grayson, T. Walter Herbert, Jr. らが、作中の事件と歴史的事実との関わりをより精密に跡づけ、この解釈を更に発展させている。² Molineux を古代の儀式において生け贄となる王に譬え、その Molineux が死ぬことで、新たな生命力が若い王たる Robin に与えられ、民族の再生が成し遂げられるとする儀式的解釈(ritual interpretation)も、アメリカ独立という歴史的文脈の中で捉えられており、従って歴史的解釈の範疇に含めて差し支えあるまい。この説は、Daniel G. Hoffman, Peter Shaw, Hazel Cohen らにより唱えられている。³

この作品に対する第二のアプローチとして、心理学的解釈(psychological interpretation)と呼ぶべきものがある。このグループに属する批評家は、フロイトの精神分析の理論を作品解釈に応用し、父親からの独立を半ば願ひ、半ば恐れる Robin が、父の代りをつとめる Major Molineux を退けることで、父親に対するコンプレックスを克服し、大人の男に成長すると主張している。Simon O. Lesser が最初にこの説を唱え、その後、Roy R. Male, Louis Paul, Frederick Crews, Dennis Brown, Robert E. Abrams などがこれに続く。⁴ また先に歴史的解釈論者として名を挙げた Daniel G. Hoffman と T. Walter Herbert, Jr. は、アメリカの国家としての独立と、Robin の心理学的独立がオーバーラップして描かれているとしており、よってこの両名は心理学的解釈論者の範疇にも含めることができよう。

そして第三に、倫理的解釈(moral interpretation)論者とも称すべき人々がいる。この解釈では、Robin が町での一夜の経験を通して、何らかモラルを学び取ったとした上で、彼が人間的成長を遂げたか否かを

論じている。Robin の成長を問題とする点において、心理学的解釈と似ていなくもないが、倫理的解釈では、フロイト流の精神分析による、子供から大人への脱皮に際する心理的プロセスに力点があるわけではなく、主人公が何らかのモラルを得たことの方に主眼が置かれている。このグループには、Hyatt H. Waggoner をはじめとして、Seymour L. Gross, Arthur T. Broes, Alexander W. Allison, Carl Dennis, A. B. England, Sheldon W. Liebman, Roger P. Wallins, J. C. Nitzsche らが属する。⁵

では以上に示した三つの解釈のうち、どれを採るのが適当であろうか。一番目の歴史的解釈について考えてみると、確かに Hawthorne は、自らの祖先が最初期のアメリカ入植者として、歴史的役割を果たしたこともあり、アメリカ植民地の歴史に多大な関心を抱いていた。事実、彼はニュー・イングランドの歴史に取材した数多くの作品を著している。しかし、彼は歴史家ではなく、小説家である。彼にとって興味の対象となるのは、歴史そのものというよりも、むしろ歴史的イベントが提供してくれるモラルである。まさに Waggoner が、“Hawthorne here has found a way of using the past to discover meanings at once personal and universal.”と述べている通りである。⁶ Hawthorne は歴史的事実を描くことを目的とはしていない。彼にとって歴史とは、小説の材料であり、あるいは作品の舞台背景を成すに過ぎない。従って、歴史的解釈は我々に多くの示唆を与えてくれこそすれ、Hawthorne が Robin の成長に託して、アメリカの歴史を語ろうとしたとは考えにくい。

二番目の心理学的解釈についてはどうか。言うまでもなく、Hawthorne はフロイトがその理論を公表する時代以前の作家であり、精神分析について知っているわけもない。にもかかわらず、Hawthorne は人間の心理について深い関心を抱き、そのことが作品の中に反映されている。“Young Goodman Brown”や“Roger Malvin's Burial”などを読むと、Hawthorne がフロイトの精神分析を知っていたのではないかと錯覚を覚えるほどである。しかし、彼が人間心理に関心を持っていたのは、小説家としてであり、心理学者としてではない。心理分析は手段であって、目的ではない。よって精神分析自体は作品のテーマとはなりえず、むしろ彼の関心は、そこから導き出される人間ドラマやモラルに向けられていたと考えられる。心理学的解釈は、Robin の心の動き理解する上で、我々に有効な手立てを提供してくれるが、それが“My Kinsman, Major Molineux”という作品の本質を衝いていると言いはれない。

歴史的解釈も心理学的解釈も妥当性に欠けるとなると、残るは三番目の倫理的解釈のみである。Hawthorne の文学は、その豊かな作品世界故に、様々な角度から光を当てることが可能であろう。だが、彼は基本的にモラリストであり、人生における出来事に何らかの意味を見い出さずにはおれなかった。いくら Hawthorne を新奇な切り口で解釈してみせようとしても、やはり我々はこの平凡な、しかし厳然たる事実を否定することはできない。従って、今後私は、倫理的解釈の立場から、“My Kinsman, Major Molineux”という作品に論究を加えていきたい。

先に倫理的解釈論者として、十人ほど名前を列挙したが、同じモラル論者とは言いながら、いざこの作品を通じて Hawthorne が示さんとしたモラルは何か、あるいは一夜の出来事から Robin はいかなるモラルを学んだかとなると、意外なことに、多くの場合、答えは明らかにされていない。ただ Robin はこの事件を通じて経験を積み、貴重なモラルを得て、子供から大人に成長したというだけで終わっている。例えば Hyatt H. Waggoner は、“Robin has finally come to understand something of the moral complexity of the world and to accept his own complicity in the universal guilt.”と述べているが、では具体的に、“the moral complexity of the world”と“his own complicity in the universal guilt”は何を指すかとなると、どこにも書かれていない。⁷ また Seymour L. Gross は、最終的に Robin が“an apprehension of the nature of moral reality”に達したとしているが、ここでもやはり“the nature of moral reality”の具体的内容は不明のままである。⁸ Roger P. Wallins に至っては、“the way is open for further growth

and real independence”とあるだけで、その根拠はどこにも示されていない。⁹ 先に歴史的、もしくは心理学的解釈論者に含めた内にも、作中にモラルらしきものを求める人がいるが、彼らの意見も同様に漠然としたものでしかない。例えば Daniel G. Hoffman は、Robin の至った自己認識にこの作品のモラルがあるとしているが、では一体彼は自己をどのようなものとして認識したというのか。¹⁰

もちろん中には、モラルの内容をはっきりさせている論者もいる。だが、彼らの意見は必ずしも一致していない。A. B. England によれば、“what Robin Molineux learns is something about the inefficacy of the will in a mysterious and complex world.” となるし、J. C. Nitzsche の見解では、精神的価値の物質的価値に対する優越性とされている。¹¹ 残る Arthur T. Broes, Alexander W. Allison, Carl Dennis, Sheldon W. Liebman の四人は、微妙なニュアンスの違いこそあれ、Robin が直面したモラルとは悪の存在であるとの点で意見が一致している。¹²

確かに、Robin が町での経験を通じて、この世における悪の存在を知ったことに間違いはなかろう。錚々たる顔触れの研究者たちが、揃いも揃って意見の一致を見ているとあっては、今更反論の余地などあるまい。だが Robin が見いだしたモラルとは、それだけにとどまらないのではないか。彼が知ったのは、独立して存在する悪ではなく、善の背後に潜んでいる悪ではないだろうか。いや、善が表で、悪が裏だというわけではない。より正確に言えば、善と悪との混淆である。善と悪は別々に存在するわけではなく、互いに分かちがたく混じり合っており、そのどの部分までが善で、どの部分までが悪などと言い切ることはできない。それは単純に善とか悪の観念で割り切られることを拒んでいる。そのため場合によっては、単なる善と悪の二重性ではなく、三重性かもしれないし、四重性かもしれない。このモラルは、Robin の人生開眼へのガイド役をつとめる紳士の、“May not one man have several voices, Robin, as well as two complexions?” という言葉に暗示されている。¹³ 一面的価値観では評価しきれぬ、物事の背後に潜む二重性、あるいは多重性を認識するためには、二面的、あるいは多面的価値観が必要とされる。これこそが Robin が最終的に到達したモラルではあるまいか。これはいささか陳腐なモラルと思えるかもしれないが、これまで意外にも見逃され、はっきりそれと指摘した論者は誰もいなかった。

私の主張を裏づけるため、作中に現れる様々なものが、このモラルを暗に仄めかすよう配されている事実を指摘したい。すなわち、事物にせよ、人物にせよ、ことごとく一面的価値観では割り切れない二重、三重の意味が込められている。ある事物なり人物なりが意味するものについて、これまで数多くの評論家が様々な解釈を提出してきたが、しばしばその見解は互いに相違している。このことは取りも直さず、元々その対象に多重な意味が秘められていたことの証しとなりはしまいか。つまり、各評論家の解釈が間違っていたということではなく、それぞれ一面において正しかったわけである。ただ、意味を一つに限定しようとしたところに、誤りがあったのではあるまいか。

この点をストーリーに即して、具体的に検討してみよう。まず第一パラグラフでは、独立革命前の騒然としたアメリカ植民地の歴史的状況が述べられている。ここでいきなり、植民地総督の置かれたアンビバレントな立場と、植民地住民の同じくアンビバレントな態度とが提示される。すなわち、植民地総督はアメリカ現地に駐在する者として、植民地の一員でありながら、一方では王の任命により現地に赴いたイギリス人でもある。またイギリス本国から受けた命令を忠実に執行する役人の立場にありながら、一方で植民地住人の気持ちに配慮して、その命令を適当に和らげている。しかしそのために、本国の叱責を被ることになる。植民地の住人にしても、自由と民主主義の理想を声高に唱えつつ、そこには他者が権力を行使することへの嫉妬の気持ちが交ざっている。彼らは圧政者たるイギリスに抗し、独立を求めて雄々しく立ち上がるが、必ずしも自らの咎のない総督に迫害を加え、必要以上に残虐な扱いをなす。この場合、総督側と植民地側のいずれに正義があるとも決め難い。それぞれに正当性があり、また不当性がある。このよ

うに、物語の背景をなす状況からして、既に二面的価値観を有している。

以上のような複雑な時代背景の中に Robin は放り込まれる。彼が渡し舟に乗ってボストンの町を訪れるのは、この二面性の物語が始まるに丁度ふさわしい時刻である。すなわち、昼が終わり、夜が始まろうとする頃合いである。昼と夜の中間の、いずれともつきかねる時間帯は、今後 Robin がどっちつかずの曖昧な二面的、あるいは多面的価値観の世界をさまようことを予感させる。Robin の町への到着時刻とされている夜の九時といえば、もう真っ暗ではないかと思われるかもしれない。しかし、夏の夜はなかなか暮れず、ましてや Mario L. D'Avanzo, Peter Shaw, 及び Robert C. Grayson の言うように、midsummer の晩のことだとすれば、なおさらであろう。¹⁴ すると夜九時近い時刻とはいえ、まだ明るみが残っていると考えても差し支えあるまい。しかも D'Avanzo たちの推定が正しいとなると、midsummer は、日が次第に長くなるこれまでの半年が終わり、日が徐々に短くなる残り半年が始まる、丁度両者の中間の時にあたる。またこの日は、象徴的な意味で夏の復活を言祝ぐ、新旧交替の時でもある。Robin の冒険にとって、これほど似つかわしい日はなかろう。

Robin は十八歳になるかならぬかの若者である。もう体はすっかり大人と言ってもよく、精神的にもかなり大人びているが、まだ完全に子供から脱しきれてはおらず、多分に幼さも残している。つまり大人でもあり、同時に子供でもあって、まさにこれから二面的価値観の世界を旅するにふさわしい年齢である。

渡し守に船賃を支払った Robin は、父の従兄弟の Major Molineux を探しに、意気揚々と町中へ乗り込んで行く。Molineux の住まいが分からぬ Robin が、最初に道を尋ねた相手は、立派な身なりをした老人である。身に着けたかつらや絹のストッキング、“I have authority . . .” (211) との発言などからすると、この老人はかなり社会的地位のある紳士らしい。しかしそれとは裏腹に、たとえ相手が年少の田舎者であれ、老人の言動は徹岸不遜で、失礼極まりない。つまりこの老人は、立派な社会的名士としての顔と、権威を笠に着た傲慢な威張り屋としての顔の、二つを持っている。どちらか一方が彼の真実の顔で、もう片方が偽りの顔というわけでは決してない。どちらも彼の本当の顔であり、その両者が相俟って、はじめて彼という存在が成り立っているのである。Robin に話しかけられた老人は、激しい“anger”と“annoyance” (211) の入り交じった口調で返答し、また激しい叱責の言葉の合間に、規則正しく二度の陰気な (“sepulchral”) 咳を挟むが、これが “a thought of the cold grave obtruding among wrathful passions” (211) のような印象を与える。ここにもさりげなく老人の二面性が仄めかされている。

次に Robin は町角の宿屋に入っていく。そこで食事を楽しんでいる人たちを目にして、彼は空腹を覚えるが、懐には食事をするほどの金が残っていない。それと知った宿の亭主は、Robin を嘲笑して、追い出しにかかる。ここで Robin は、金銭の持つ恐るべき二面性を思い知らされる。すなわち、金を持ってさえいれば、何でも好きなものを買うことができるが、金がなくては何も手に入らず、世間から嘲弄されるばかりである。金は利便性と酷薄さを合わせ持っている。

Robin に対する宿の亭主の態度にも、二面性は明らかである。最初は上客と思ってか、お世辞をふんだんに振り撒いて、丁重に Robin を迎えるが、ひとたび相手が金もろくに持っておらず、しかも Major Molineux の親戚だと知ると、手のひらを返したように態度を豹変させる。先の老人の態度が権威者の二面性を象徴するとすれば、宿の主人の態度は商売人の二面性を表していると言えようか。

宿を逃げ出した Robin は、Molineux を探しながら、町のメイン・ストリートを歩き回る。通りは広々として、街灯に明るく照らされ、両側には立派な背の高い家が列なっている。店のショー・ウィンドーには豪華な品々が並べられ、そこを最新流行のファッションを身にまとった男女がにぎやかに練り歩く。ところが一歩角を曲がると、そこには別世界が広がっている。暗くみすばらしい通りには、人っ子一人姿が見えない。道の両側には、貧弱な背の低い家がだらだら続いている。そこで Robin が出会うのは、きらびや

かに着飾った紳士、淑女などではなく、物陰にひっそりと身を潜ませる夜の女である。この表通りと裏町との鮮やかな対比の中に、町というものの持つ二面性がはっきり表れている。経済の中心地として、町には資本が集中し、富裕層が生まれると同時に、成功から取り残された人々により貧民街が形成される。町は一方的に繁栄の巷でもなければ、また貧困の巢窟でもなく、宿命的にその両方を宿している。

Robin が裏町で出会う緋色のペチコート の女にも、やはり異なる二つの顔がある。彼女は優美な姿、かわいい顔立ち、銀を流したような声の背後に、Robin を誘惑せんとする魔性の心を秘めている。彼女は Robin に対し、しきりに親切めかした素振りを見せるが、それが本心でないことは言うを俟たない。先に引用した “May not one man have several voices, Robin, as well as two complexions?” との紳士の言葉に對して、Robin は、“Perhaps a man may; but Heaven forbid that a woman should!” (226) と返事をしているが、ここで Robin が思い浮かべている女性とは、緋色のペチコート の女にほかならない。従って、彼女は女性全体を代表しており、そして Robin の願い虚しく、二つの顔を持っている。

ここでの Robin の態度は揺れている。彼は相手に “Pretty mistress” と呼びかけ、その後で “for I may call her so with a good conscience . . . since I know nothing to the contrary . . .” (216) と、その理由づけをしている。この言葉には、黒でなければ、然らずんば白という、彼の一面的思考パターンが如実に表れている。彼女が “pretty mistress” でないという証拠がないからといって、それが即、彼女が “pretty mistress” であることの証明にはならない。“pretty mistress” とその対極にある女性との間には、様々な段階があるはずである。彼には、同一のものが白と黒の両面を合わせ持ったり、両者が混じり合った灰色が存在することが分かっていない。

しかしその一方で、彼は彼女の言葉を額面通り受け取って、そのまま信用するのではなく、相手の仕草、目付き、口調などから、その真意を汲み取ろうとしている。更には、人の好い田舎者を装うことで、ある種の二面性を伴う言動をなしている。彼を家の中に誘い込もうとして嘘を吐く女に對し、彼の方でも巧みに嘘と誠をないまぜにして、Molineux の所在を確かめようとする。だが、所詮まだ本物となっていない、付け焼き刃の二面性は役に立たず、彼は危うく誘惑の罠に陥りそうになる。ここで Hawthorne は、Robin のアンビバレントな心理状態を見事に描写している。

So saying, the fair and hospitable dame took our hero by the hand; and though the touch was light, and the force was gentleness, and though Robin read in her eyes what he did not hear in her words, yet the slender waisted woman, in the scarlet petticoat, proved stronger than the athletic country youth. She had drawn his half-willing footsteps nearly to the threshold (218)

Robin は相手の言葉を信じまいとする気持ちと、甘い快樂を味わってみたいとの気持ちの間で分裂をきたしている。結局、後者の欲望が勝り、彼は家の中にふらふらと入って行こうとする。彼がこの危機から救われたのは、自分の力によるものではなく、夜警が丁度折よく姿を現したおかげである。にもかかわらず、Robin はこのような経験を重ねることで、従来の単純な一面性を次第に克服し、二面的価値観へと脱皮していく。

夜警に對する Robin の気持ちも一筋縄ではいかない。そもそも Robin が田舎から出てきたのは、町の有力者である Molineux の援助を得て、功成名を遂げ、自らも社会の秩序を体現する側の人間になりたいと願ってのことであった。ところが、“the youth felt an instinctive antipathy towards the guardian of midnight order” (218) とあるように、彼は社会秩序の擁護者たる夜警の権威的な態度に本能的反発

を感じている。Simon O. Lesserによると、Robinは当初から父、あるいはその代用をつとめるMolineuxに対して、相矛盾する感情を抱いていたという。つまり、表面的な意識のレベルにおいては、RobinはMolineuxを探し出し、その権威の後継者となることを望んでいながら、心の奥の無意識のレベルでは、Molineuxを見つけない密かな理由があった。というのも、もしもMolineuxを見つければ、Robinは一時的に逃れてきた田舎の父、もしくは父に代表される権威というものに再び服することになるからである。¹⁵ Robinは権威に憧れつつ、権威を恐れている。このような相反する感情が、彼の言動を複雑なものとしている。

夜警自身も二面性を備えた存在である。Robinが考えている通り、夜警は一方では町の秩序維持の役割を担っている。しかし他方では、作品のクライマックスの場面で明らかなように、彼は社会の権威を象徴するMolineuxに暴行を加える群衆を止めぬばかりか、それを面白がって、笑いながら見物している。ここで彼は秩序の維持者どころか、その破壊者と化している。また彼は、緋色のペチコートの子の仕事を邪魔して、危ういところでRobinを助けこそするが、職務熱心とはとても言い難い。ただ夜警としてのつとめをおごなりに果たしているに過ぎない。その証拠に、彼はRobinに警告を発した後、その効果のほどをろくろく確かめようとせず、早々に立ち去ってしまう。その隙を利用して、夜の女は再びRobinの誘惑に取り掛かる。うがった見方をすれば、夜警はわざと目こぼししていると勘ぐれなくもない。彼は秩序維持をつとめとする者の二面性を表していると言えよう。

夜の女から逃れたRobinは、町をさまよっているうちに、異様な風体をした一団の男たちに二度出くわす。彼らはわけの分からぬ言葉を操ると同時に、英語も話すことができ、やはり二つの顔を使い分けている。彼らの奇妙な服装も、もう一つの顔を隠すための変装である。こう言ってしまうと、普通の服装をして、英語をしゃべる方が素顔で、異様ななりをして、意味不明の言葉を弄する方が仮面だという誤解を与えてしまうかもしれない。確かに最初はそうであったかもしれないが、*The Scarlet Letter*の中で、“No man, for any considerable period, can wear one face to himself, and another to the multitude, without finally getting bewildered as to which may be the true.”とある通り、仮面をあまりに長く着けていると、いつの間にか素顔との区別がつかなくなってしまう。¹⁶

道を尋ねるたびごとに、嘲笑もしくは罵声を浴びせられ、ついに辛抱しきれなくなったRobinは、次に出くわした男から、手にした棍棒に物を言わせて、Molineuxの居所を聞き出そうとする。その男というのは、まるで二面的価値の観念が人間の肉体に具現化されたかのごとき容貌をしている。Robinは以前一度、この男を宿屋で見かけている。その時より既に、男の容貌は二面性を暗示していた。すなわち、額が盛り上がり二つの瘤となり、その間に生じた谷で顔が二分されている。前回は暗示にとどまっていたものが、今回は明示されている。顔の半分が燃えるような強烈な赤で、もう半分が真夜中のような黒で染め分けられ、耳まで裂けた口は、顔の色とコントラストをなして、黒と赤に塗られている。赤と黒の色は、それぞれ何を表しているのだろうか。本文中には、“The effect was as if two individual devils, a fiend of fire and a fiend of darkness, had united themselves to form this infernal visage.” (220)と書かれており、赤は火を、黒は闇を意味するとされている。ところがこの男が三たび登場する行列の場面では、“The single horseman . . . by his fierce and variegated countenance, appeared like war personified; the red of one cheek was an emblem of fire and sword; the blackness of the other betokened the mourning which attends them.” (227)となっており、赤は火と剣の、黒はそれに伴う悲しみの色と解釈されている。この点に関して、Hawthorneの説明は一貫性を欠くように思われる。しかしここで注目すべきは、Hawthorneが最初の説明では、“The effect was as if”という言い回しを用い、二番目の説明でも、わざわざ“The single horseman . . . appeared like”としている点である。Hawthorneは赤と黒が表すもの

を、「～である」とは断言せず、「あたかも～のようで」とか、「～らしく思われる」というように、ことさらに表現をばかしている。本文の記述をそのまま鵜呑みにして解釈する論者も多くいるが、実のところ、Hawthorneは仄めかすにとどめて、何ら明確な答えを提示していないのである。そのせいもあってか、作者の仄めかしに関わりなく、赤と黒に独自の意味合いを見いだそうとする論者もいる。例えば Roy R. Male の意見では、赤黒に染め分けられた男の顔は、Robin の心の中での“yearning for freedom from authority and for a worldly patrimony”の葛藤を表すとされ、Seymour L. Grossによれば、“his face, marked in red and black, is the geography of Robin’s voyage—the voyage from the blind innocence of a primal paradise to the scorching fire of satanic knowledge.”となる。¹⁷ また William Bysshe Stein は、赤は“life”の、黒は“death”の色であるとしている。¹⁸ だが私はここで、赤と黒がそれぞれ何を意味するかを考えようとは思わない。それよりも、赤と黒の表すものを、Hawthorne が取えて韜晦したことの意味に着目してみたい。つまり彼にとっては、個々の色自体はさして意味がなく、二色に分かれていることの方に、より重要性があったのではないだろうか。そして、この二色の顔を持つ人物を通して、物事には二面性があることを述べたかったのではあるまいか。当然ここに、“May not one man have several voices, Robin, as well as two complexions?”との言葉が呼応してくる。

Robin は棍棒で威嚇して、男から Molineux の住まいを聞き出そうとするが、所期の目的は達せられず、ただこの場で一時間待てとの返事を得たにとどまる。ここでも Robin は、二面的価値観の壁に突き当たる。すなわち彼の持つ棍棒は、力が物を言う田舎では、その威力を大いに発揮し、それなりの成果を上げたかもしれない。しかし町ではおよそ役に立たない。Robin はあっさりと男に身をかわされてしまう。Robin は宿の主人から嘲笑を浴びせられた際にも、棍棒を一発お見舞いしようと思いつく。だが人目のない森の中ならいざ知らず、衆人監視の町中ではそうもいかず、宿屋をすごすご後にしている。また棍棒は、元々身を守るために携えていたものが、いつの間にか暴力の道具に意味を変えてしまっている。このように、たかが棍棒一本とはいえ、そこには何重もの意味が込められている。

Robin は奇妙な顔の男についてしばらく思いを巡らす、すぐに“settled this point shrewdly, rationally, and satisfactorily” (220) してしまい、他に楽しみを探し始める。多様な側面が重なり合う現実世界は、“shrewdly, rationally, and satisfactorily”に解決できるものではない。彼は勝手に解決できたつもりになっているに過ぎず、二面的価値観の世界を理解するには未だ至っていない。

Robin は所在無げに教会の階段に腰を下ろして、“he endeavored to define the forms of distant objects, starting away with almost ghostly indistinctness, just as his eye appeared to grasp them . . .” (221) している。ここでは、事の本質を捉えることがいかに困難であるかが、譬えを用いて述べられている。それは捕まえたと思ったその瞬間、指先からすりりと逃げてしまう。なぜなら、物事の本質とは二面的、多面的であり、その把握には複眼的視点が必要とされるからである。

続いて彼の耳には、“a murmur, which swept continually along the street, yet was scarcely audible, except to an unaccustomed ear like his” が聞こえてくる。それは、“a low, dull, dreamy sound, compounded of many noises, each of which was at too great a distance to be separately heard” (221) である。ここでは先程と同じ内容が、視覚的比喩に代わって、聴覚的比喩を用いて述べられている。Robin の耳には、定かならぬ、ぼんやりとした一つの音でしかなくとも、それは実は、多くの異なる音から成り立っている。だが、一面的価値観しか持たない Robin には、一つ一つの音を聞き分けることはできない。

眠気を振り払うため、Robin は窓から教会の内部を覗き込む。月の光が、説教壇に置かれた聖書の開いたページに当たっている。その光に関しても、二面的解釈が施されている。すなわち、“Had Nature, in that deep hour, become a worshipper in the house, which man had builded? Or was that heavenly light

the visible sanctity of the place, visible because no earthly and impure feet were within the walls?"

(222)とある。教会は、多くの信者が心をつにして、神に対する信仰を表明する場である。信仰を同じくする者がここに集い、互いに心を通わせ合う。また、信者一人一人が神との心の中での対話を通して、神への愛を確認する。ところが、教会内部の様子を目にした Robin は、これまで最も深い森の奥でさえ経験したことのない孤独を感じて、思わず身震いする。確かに、教会は本来、友愛と神への愛の実現の場であらねばならぬはずが、一方でそのあまりに峻厳なる教えや戒律のため、ともすれば地上的なものを拒否して、人間的感情を寄せ付けぬところがあったことは否めない。とりわけ、この物語の舞台が、厳格なるピューリタンの本拠地たるボストンであることを思い出して頂きたい。神聖なる光に照らされてこそいるが、誰一人として信者の姿の見えぬ教会は、人間性の不在を象徴しており、それ故に Robin は孤独を感じたのではあるまいか。教会の冷厳さは、その後 Robin が夢うつつの内に目にする、故郷での夕べの祈りの情景との対比で明らかである。牧師をつとめる父の家では、祈りは建物の中ではなく、日の光を浴びた戸外で行われる。一本の大きな木の下に、家族のみならず、隣近所の人々や、偶然来合わせた旅人もともに集い、神への感謝を捧げ、信仰の思いを新たにす。そしてその場に居合わせぬ Robin のことを思って、父の祈りの声は震え、母は涙を見せまいと顔を背け、兄は必死に感情をこらえ、妹たちは涙に暮れる。

また教会は厳かで清浄なる気に満ちているが、Robin はそこでぞっとするような恐怖に襲われる。それは教会の周囲に立ち並ぶ墓石を目にしたためである。教会に墓は付き物であり、そのため必然的に忌まわしい死のイメージがつきまとう。その連想で、Robin は Molineux の死を想像するに至る。このように教会は多様な側面を備え持つ。

ここで Robin の思いは、先述した故郷の家族のもとへと飛ぶ。そこには冷厳なる町の教会に対するアンチテーゼとして、愛情溢れる家族の様子が描かれているが、やはり全面的に肯定されているわけではない。確かに彼らは、お互いを心から思い遣る、理想的な家族である。しかし、いくら美しい家族とはいえ、Robin はいつまでもそのぬるま湯に浸かっていることは許されない。彼は世間の荒波の中へと飛び込み、おのれ一人の力で自らの人生を切り開いていかなくてはならない。優しい家族は、彼が一人の大人の男として、自立して生きていくためには、どうしても乗り越えねばならぬ障壁でもある。従って、ひとたび人生に乗り出した Robin は、もはや元の生活に戻ることはできない。その動かしがたい現実が、“Then he saw them go in at the door; and when Robin would have entered also, the latch tinkled into its place, and he was excluded from his home.” (223) という彼の夢に暗示されている。この持つべきと同時に、否むべき存在でもある家族の二面性の問題は、父親の姿に凝縮されているとして、心理学的解釈論者に格好のテーマを提供してきた。この点については既に種々論じられているので、私がこれ以上口を挟むことは差し控えたい。

物思いから醒めた Robin は、目の前に聳える立派な邸宅に注意を向ける。まだ意識朦朧とした彼の目には、バルコニーを支える柱は長く伸びて、背の高い松の幹ように見えるかと思えば、次の瞬間には縮んで、人間の姿を取り、それから本来の大きさとし形を取り戻す。この同じ変化は、何度も繰り返される。堅固なはずの邸宅の柱でさえ、大きくなったり、小さくなったりと姿を変えている。これは何物であれ、固定した不変の外形を保つものではなく、時によって異なる様相を帯びることの譬えであろうか。

では、なぜこのようなことが起きるのか。この時の Robin の精神状態を説明して、“his mind kept vibrating between fancy and reality” (223) と書かれているが、これは人間一般の精神の在り方を表す言葉ともなりうる。すなわち、人間の心は常に“reality”を直視しているわけではなく、実際には、個々人の持つ性向や観念に従ってバイアスがかかり、思わず知らずの内に、“fancy”の世界へと踏み込んでしまう。つまり、人間の心は“fancy”の領域と“reality”の領域の間で揺れており、それにつれて心に映じる事象

もまた揺れるのである。従って、ある対象を指して、これは“fancy”であるとか、“reality”であるとか、決めつけることはできない。またどこまでが“fancy”で、どこまでが“reality”であるか、言い切ることも不可能である。なぜなら“fancy”と“reality”は、人間の心の中で区別がつき難く混じり合っているからである。

この時 Robin は、道を行く壮年の紳士を見かけて、声をかける。彼は自らの身の上を語る中で、“I have the name of being a shrewd youth” (225) と述べる。これは世間で成功するために必要な才幹を持つことを自慢して、口から出た言葉であるが、果たして“shrewd”であることが、それほど誇るべき資質であろうか。“shrewd”という言葉は、Robin を評して、これまで作品中に何度も使われているが、そこには多分に皮肉なニュアンスが込められている。彼の言動や判断が、実は彼が思っているほどには“shrewd”ではなく、現実の事態に対処しようにも、効を奏さないことへの皮肉である。なぜ彼の“shrewdness”は役に立たないのか。それは“shrewdness”にもやはり二面性があるためである。“shrewdness”は、常識的な通常の事柄を判断し、処理するためには、その威力を存分に発揮するかもしれない。だが所詮“shrewdness”は、合理的解釈の具としてのみ有効であり、悪く言えば、小手先だけの「賢しら」、「小賢しき」に通じる。合理的思考の枠に収まり切らぬような事態に対処するには、“shrewdness”では用をなさない。そこで必要とされるのは、論理を超越した直感と包括的理解力である。Robin は夢うつつの状態で、自分が家から締め出される夢を見て、二度と家族のもとへ戻れぬ現実を悟ったことは先に述べた。この場合、Robin の醒めた意識による“shrewdness”が理解しえぬ事柄を、無意識の領域における精神作用により、夢がその意味を明らかにしたといえる。同じことは、この後 Robin が目撃する Molineux 追放の行列の情景についても当てはまる。“shrewdness”による意識的努力では見えてこなかった Molineux や自らを取り巻く真実が、夢ともうつつともつかぬ朦朧たる意識の中で、はじめて Robin の目に映じたのである。まさに Hyatt H. Waggoner が、“Truth, as Hawthorne believed, may sometimes come more clearly to the haunted mind hovering between sleep and waking than to the mind fully awake.” と述べている通りである。¹⁹ このように“shrewdness”は、時と場合により、有用な武器とも無用の長物ともなりえて、いわば諸刃の剣といえよう。

壮年の紳士は、Robin と一緒に教会の石段で Molineux を待つことにする。この紳士を評するに、Robin を人生開眼へと導くガイドの役を果たしているとして、好意的な見方が大勢を占めている。確かにそのような側面は否定できまいが、彼は親切一方の人物ではなく、多分に冷酷な一面を兼ね備えている。Robin を人生に覚醒させるためには、Molineux の真実の姿を目撃させることを必要としたかもしれない。しかしその際、Robin のショックを和らげるため、予め Molineux の置かれている状況を、多少なりとも説明しておくべきではなかったのか。若い Robin にむごたらしい現実を突き付けて、心に傷を負わせる危険を冒す必要まであったのか。紳士の““In the mean time, as I have a singular curiosity to witness your meeting, I will sit down here upon the steps, and bear you company.” (225) ”との言葉は、彼が Robin に付き合う動機を隠さずも暴露している。尊敬すべき Molineux が辱めを受ける様子を目にした時、Robin がいかなる反応を示すか観察したいとの好奇心が、紳士をその場に留まらせている。Hawthorne の作品には、例えば Chillingworth, Holgrave, Coverdale, Kenyon, Dr. Rappaccini, Ethan Brand などのように、人間の心の動きを科学的興味をもって冷やかに眺める観察者タイプの人物がしばしば登場する。このグループの中に紳士を含めるのはいささか酷であろうが、存外共通する要素を持ち合わせている。一見すると、文学作品におけるコンベンショナルなガイド役とも思える彼でさえ、そう単純には割り切れぬ複雑さを秘めていると知れる。²⁰

次第に近づく行列の騒音を耳にした Robin に、その意味を尋ねられた紳士は、3、4人の騒々しい連中

が外をうろついているだけで、夜警がすぐに彼らを追いかけるだろうと答えている。ここで紳士は、明らかに騒ぎの原因を知っていながら、いい加減な嘘を吐いて、真実を隠している。騒いでいるのはたった3、4人ではないし、また夜警は暴徒を取り締まるどころか、彼らに同調して、Molineux に嘲笑を投げかけている。この点は Robin も気づいているらしく、あれだけの騒ぎからすると、暴徒は大勢にちががなく、夜警がたくさんいなくては、とても食い止めることはできまいと反論する。そこで紳士は、例の “May not one man have several voices, Robin, as well as two complexions?” との台詞を口にする。これは一般的な意味では真実を表す言葉であるが、この場面では、Robin の疑問に正面から答えた返事とはなっていない。レトリックを用いて、相手の質問を巧妙にはぐらかしているに過ぎない。ここで Hawthorne は、物事の二面性という作品のテーマを示す重要な言葉自体に二面性を秘めさせるという、巧みな韜晦ぶりを発揮している。

行列が近づくと、Robin の耳には人々の笑い声と楽器の音が聞こえてくる。それを愉快なお祭り騒ぎと勘違いした彼は、仲間に加わるために走りだそうとする。この振る舞いは、物事の二面性を十分に弁えぬ Robin とすれば、ある程度致し方ないところであろう。というのも、暴動にもやはり二つの側面があるからである。人に危害を加え、辱めを与えるという点では、暴動には陰惨なむごたらしさが避けられない。ましてや迫害を受ける側の身になってみれば、凄まじい苦痛と恐怖がつきまとう。その反面、迫害を加える側にとっては、暴動は今までの鬱積した感情を一気に爆発させ、ある種のカタルシスを感じさせるよい機会を提供してくれる。そこには残忍な喜びと同時に、解放の快感が伴い、自ずと陽気な祝祭の外観を呈する。Robin はこの一面のみを捉えて、性急な判断を下してしまったわけである。だが、“On they went, in counterfeited pomp, in senseless uproar . . .” (230) と述べられているように、行列はいくら “pomp” なものであっても、“counterfeited pomp” であり、また “uproar” は “senseless” でしかない。

先に紹介した儀式的解釈論者の見解でも、Molineux に加えられる迫害は二つの側面を持つこととなる。年老いた王になぞらえられた Molineux は、群衆の暴力によって儀式的な死を遂げる。だが彼の死により、若い後継者に新たな生命が与えられ、王に任命される。すると群衆は、新しい王の誕生に象徴される民族の再生を祝って、喜びを爆発させ、お祭り騒ぎを繰り広げる。要するに、民族の生命力再生の儀式には、忌まわしい暴力と歓喜の祝祭がワン・セットになっているのである。

やがて行列は Robin の目の前までやってくる。そこに、“Then a redder light disturbed the moonbeams, and a dense multitude of torches shone along the street, concealing by their glare whatever object they illuminated.” (227) という文章が出てくる。更にもうしばらく後には、“the unsteady brightness of the latter [the torches] formed a veil which he could not penetrate.” (228) ともある。つまり、篝火の光がぎらぎらと明る過ぎて、却ってよく見えなくなってしまうというわけだが、なぜ作者はことさらにこのようなことを書いたのだろうか。この作品の舞台は、二種類の光に照らされている。月光と灯火の二つである。ある評論家は、両者の働きを特に区別しようとはせず、自然の光であれ、人工の光であれ、Robin の歩む暗い通りに射し込む光が、彼の敢えて見まいとする現実を照らし出すとしている。また最後の場面では、両者が相俟って、Molineux の真実の姿を情け容赦なく暴き出し、Robin の現実への覚醒を促すと論じている。²¹ しかし実際には、本文中に、“a redder light disturbed the moonbeams” とはっきり書かれており、作者が両者を異なるものとして捉えていることは明らかである。この文章は、本来ありのままの姿を照らし出す役目の篝火が、その強烈な照り返しの故に、対象の微妙なニュアンスや細部の相違を消してしまい、逆に真実の姿を見えなくさせていると解するべきではあるまいか。人工の光は、現実の表面こそ余すところなく照らし出しさえすれば、その奥に隠された深遠な真理に対しては、却って “veil” となりかねない。

人工の光が果たす役割は、ここに至る物語の展開の中にも跡づけることができる。物語の大部分は仄かな月の光の下で進行するが、所々で強烈な人工の光が射し込んでくる。例えば、Robin が老人と初めて出会った時には、床屋のドアと窓から漏れる光が二人の姿を照らしている。Robin が宿屋の主人から嘲りを受ける場面は、明るい屋内である。また、Robin が緋色のペチコートの人に誘惑されかかった時に姿を現した夜警は、手にランタンを提げている。ここに挙げた三人は、いずれも二面性を備えた人物である。そして Robin は彼らの二面性を見抜けず、当惑させられる。つまり人工の光は微妙な二面性の陰影を拭い去り、Robin が真実を見ることを妨げている。

それに比して月の光は、対象を眩く照らし出しこそせぬが、細部の陰影を損なうことなく、ありのままの姿を顕してくれる。定かならぬ曖昧な部分を残しはするが、それが見る者の想像力に訴えかけ、さもなければ見えない隠された真実が、その時はじめて見えてくるかもしれない。Robin が夜の女の誘惑を受けた時、舞台は月の光に照らされていた。そのため、彼には女の姿がよく見えなかったにもかかわらず、彼は相手の言動に隠された二面性に漠然とながらも気づき、警戒心を示している。この月光の働きは、Hawthorne がその著作の中で、ロマンス論と絡めて、しばしば月光の特質について述べている内容と呼応する。例えば *The Scarlet Letter* の “The Custom-House” には、以下のような記述がある。

Moonlight, in a familiar room, falling so white upon the carpet, and showing all its figures so distinctly,—making every object so minutely visible, yet so unlike a morning or noontide visibility,—is a medium the most suitable for a romance-writer to get acquainted with his illusive guests. . . . all these details, so completely seen, and so spiritualized by the unusual light, that they seem to lose their actual substance, and become things of intellect. Nothing is too small or too trifling to undergo this change, and acquire dignity thereby.²²

ここで “a morning or noontide visibility” と言っているものを、「人工の灯火」と置き換えてみれば、Hawthorne の考える月の光と人工の光の働きの違いは自ずと明らかとなろう。月光の下こそ、ロマンスを物するに最も適した環境だと述べているが、ロマンスの目的は真実を示すことにあり、従って月光こそが真実を照らし出す光ということになる。また *Twice-Told Tales* の前書きにも、自らの著作を説明して、

“The book, if you would see anything in it, requires to be read in the clear, brown, twilight atmosphere in which it was written; if opened in the sunshine, it is apt to look exceedingly like a volume of blank pages.” とあるが、この場合も、“twilight” を “moonlight” に、“sunshine” を “man-made light” にそれぞれ読み替えば、月光の意味するところは一目瞭然となる。²³

行列を見物する人々の反応は、必ずしも一面的ではない。彼らは皆が皆、Molineux の屈辱の顔を面白がっているかと言えば、そうでもない。あるいは少なくとも、彼らは全面的にこの情景を面白がっているわけではない。というのも、何人かの女性は、“shrill voices of mirth or terror” (228) を発している。つまり彼女たちは、“mirth” だけでなく、同時に “terror” も感じていることが分かる。

Molineux を嘲弄する見物人の中に、前に Robin が道を尋ねて罵倒された老人の姿が見られる。先の場面でも彼の二面性は既に明らかであるが、ここでも彼のいかめしい顔の上に、痙攣的に楽しみの表情が浮かぶ様子が、まるで “a funny inscription on a tomb-stone” (230) のようだと譬えられている。しかも、植民地政府役人の Molineux を嘲罵するこの老人は、一見すると独立派だが、実は王党派ではあるまいかと Julian Smith は主張している。というのも、歴史的考証によれば、Robin がその石段に腰を下ろしていた教会は、独立派の集会所であった Old South Church で、通りを挟んで向かい側の邸は、王党派の本部の

the Province House らしい。Robin は老人をこの the Province House のバルコニーに見かける。老人が the Province House を荒らす暴徒の一人として、その場に居合わせたとも考えられるが、その時の彼の様子は、“In front of the Gothic window stood the old citizen, wrapped in a wide gown, his grey periwig exchanged for a nightcap, which was thrust back from his forehead, and his silk stockings hanging down about his legs.” (229) と描写されている。ゆったりとしたガウンを身にまとい、かつらに代わってかぶったナイトキャップは頭からずり落ち、ストッキングを足元になるませた老人の姿は、どう見ても我が家で寛いでいるとしか思えない。いや、既に床に就いていたものを、もう一度起き出してきたところであろうか。the Province House で寝ていたとなると、これはもう植民地総督以外にはありえない。その総督が同僚の役人である Molineux に笑いを浴びせるとは、これまた不可解である。とすると、彼は Molineux を群衆に売ることで、自らの保身を図ったのではあるまいかと、謎が謎を呼ぶ。このように老人は、二面性どころか、三面性も四面性も持ち合わせている。壮年の紳士についても付言すれば、彼もやはり正体不明の人物であると Smith は論じている。Robin がこの紳士を最初に見かけた際、どうも相手は the Province House から出てきたらしき節があり、すると彼は王党派ということになるが、暴動のリーダーを知っているとなると、独立派にも思える。仮に彼を独立派として、では何のために彼は王党派の本部にいたのか。邸を荒らしに来たのか、それとも両派の仲介役をつとめていたのか。²⁴

群衆に混じって、Molineux を見詰める Robin の反応も、これまた一面的ではない。最初に彼が覚えた感情は、“a mixture of pity and terror” (228) である。更にその後、周囲の人々の嘲笑に感染して、彼も大声で笑いを発するが、そこには互いに矛盾する様々な感情が込められていたと想像するに難くない。期待を裏切られたことへの失望、侮辱を加えられる縁者への同情と悲しみ、犠牲者を容赦なくいたぶる群衆への抗議、徒労を重ねたことへの怒り、惨めな姿を晒す Molineux への、いや、それにもまして、今まで真実を見抜けなかった滑稽な自らへの嘲りなどが、彼の心の中に渦巻いていたことだろう。

眺められる側の Molineux の態度や立場にも、様々な側面が交差している。彼は“dignity”を保っているが、それは“tar-and-feathery dignity” (228) である。また、彼の“a head that had grown grey in honor”は、今では“foul disgrace” (229) にまみれている。つまり彼は、その職務上有する権威にもかかわらず、というよりむしろ、その権威があだとなって、辱めを被っている。彼の容姿は“betokening a steady soul”であるが、“his enemies had found the means to shake it.” (228) している。しかし、“His whole frame was agitated by a quick, and continual tremor . . .” (228-29) であろうとも、その震えを“his pride strove to quell, even in those circumstances of overwhelming humiliation.” (229) している。そして彼は“mighty no more”であって、しかも“majestic still in his agony.” (230) であり続けている。心理的解釈論者にすれば、父親の権威を象徴する Molineux は、Robin が大人に成長するためには、どうしても越えねばならぬ一種の壁であり、また歴史的解釈論者にとっては、イギリス本国の権力の執行者たる Molineux は、アメリカ植民地が独立と自由を勝ち取るためには、何としても断ち切らねばならぬ桎梏である。いずれにせよ、Molineux は形式上、この作品で敵役を割り振られている。ところが敵役のはずの当の Molineux は、いかにも憎々しげな、権威を笠に着た悪党とか、自らの不運をめめしく嘆く臆病者などとは、およそかけ離れた存在である。彼は毅然として屈辱に耐え、作中人物の内随一とも言える立派な態度を持しており、我々読者にとって、最も好感の持てる人物となっている。この良い意味での Molineux の二面的態度は、それを目にした Robin に、少なからず覚醒の契機を与えたものと推察される。

やがて行列は通り過ぎ、Robin と紳士は後に残される。ここで Robin は、もう町には飽きたので、田舎に帰りたいと口にする。町の持つ二面性については先に論じたが、ここでもう一度、少々異なる角度から

検討を加えてみたい。Hawthorne の作品において、元来町は秩序の支配する世界であった。そこでは人々が文明を享受しつつ、整然たる社会生活を営んでいる。それと対照的に、森は野獣や魑魅魍魎が跋扈する、無秩序な世界であった。そこには魔女や悪魔が姿を現すかもしれない、何が起ころうとも不思議はない、魔の領域である。The Scarlet Letter で、Hester と Dimmesdale が姦通の罪を犯すのも、Hester が魔王と出会い、その帳簿に血で署名したと称するの、いずれも森でのことである。また “Young Goodman Brown” において、Brown が目撃する悪魔の黒ミサも、森の中で開かれる。“Roger Malvin’s Burial” では、Reuben が将来の義父を瀕死のままに置き去りにしたのも森なら、魔に憑かれたかのように同じ場所を堂々巡りし、挙げ句の果てに息子を誤って銃で撃ち殺すのも森である。ところが “My Kinsman, Major Molineux” では、町と森との関係が逆転しているように思われる。本来、整然たる秩序が支配するはずの町が、ここでは甚だしい無秩序状態に陥っている。町を訪れた Robin は、道を尋ねた老人に罵られ、それを目撃した床屋の職人たちに嘲笑われ、宿屋の主人にはからかわれる。更には裏町で夜の女の誘惑を受け、それを取り締まる役目の夜警は、半ば見て見ぬふりをする。町中には、奇妙な服装をして、意味不明の言葉をしゃべる者たちや、顔を赤黒半々に塗り分け、まるで悪魔のような容貌をした男が跳梁している。最後には暴動まで発生し、衆人環視の中で平気で暴力が揮われる。政府の高官が辱めを受け、旧来の社会体制は破壊される。治安維持を司る夜警は、これを見ながら笑っている。一方、森はどうであろうか。Robin の家族が暮らす場所は、厳密には森の中とは言えないかもしれないが、おそらく広大な森に囲まれた、ごく小さな開拓地であろう。そこには厳格な父と優しい母と三人の兄妹がおり、それぞれが家庭の中で各自の役割をきちんと果たしている。開拓地のコミュニティーも、牧師の父を中心として、平和で安定した社会を形成していると察せられる。Robin からすれば、鬱蒼たる森でさえ、混乱した不可知の領域ではなく、十分理に適った世界である。町での彼は、知りたい情報をどうしても手に入れることができず、しかもその理由さえ分からずにいた。しかし森でなら、棍棒に物を言わせて、たやすく目的を達することができる。また、無礼にも彼に嘲笑を浴びせかけた連中に、もしも森の中で出くわしたなら、己の分を弁えさせてやることもできる。このように見てくると、町だから、あるいは森だからといって、一概に割り切れるものではなく、町には町の、森には森の二面性が秘められていると知れる。

そしてこの点にこそ、物事に二面性が現れる原因を考える重大なヒントが隠されている。すなわち、Robin にとっては、町は混乱を極めた無法地帯であり、森は秩序立った世界を構成する。だがそれはあくまで Robin の見方であり、他の者にとっては逆かもしれない。森の秩序の中で育った Robin の目には、町の秩序は無秩序と映ろうし、町の秩序の中で暮らしてきた者の目には、森の秩序は無秩序と映ろう。Robin が森で暴力を揮ったとしても、それは彼の秩序の観念には反しない。このように、たとえ同一のものであろうとも、それを見る人によって、自ずと異なる意味合いを帯びることになる。また、同じ Robin という人物の目から見ても、見られる対象の置かれた環境や状況が違えば、その意味も大いに違って来る。異なる環境や状況を作り出すものは、例えば夜であり、町であり、時代の流れである。夜に目にする女性は、昼に見る時とは、異なる相貌を示すかもしれない。Robin が手にした棍棒は、故郷の森という環境でこそ有効であれ、町中では用をなさない。Robin を嘲笑した老人や宿の主人や夜警にしても、もしも革命騒ぎという状況の中になければ、彼に町の有力者である Molineux の居所をこぞって教えたかもしれない。二面性を持つ様々な事物や人物にこれまで言及してきた中で、対象そのものが本質的に二面性を有する場合もあろうが、今までとは異なる視点や状況で対象を眺めたため、二面性を帯びるに至ったケースも数多くあったことが分かる。実は、この現象を仄めかすような言葉を作中に見いだすことができる。Robin が教会の石段に腰を下ろして、通りを眺めている場面で、“the moon, ‘creating, like the imaginative power, a beautiful strangeness in familiar objects,’ gave something of romance to a scene, that might not have possessed

it in the light of day.” (221) という文章が出てくる。先述した月の光と人工の明かりとの働きの違いを説明するためにも使えそうな内容であるが、ここでは同じものでも異なる環境に置かれれば、意味やニュアンスが異なってくることの譬えとも考えることができる。普段、太陽の光で見慣れているものであっても、月の光の下で見ると、これまでとは異なる様相を呈するというわけである。これは視覚上の譬えだが、すぐ後に聴覚上の譬えも使われている。石段に座った Robin の耳に、町並みを抜けて、かすかな騒音が伝わってくる。騒音は Robin のいる位置からでは “a distant shout” に過ぎないが、実は “apparently loud where it originated” (221) である。音は同じでも、それを遠くで聞くか、近くで聞くかによって、小さくもなれば、大きくもなる。

行列の通過した後、Robin と紳士の間で交わされる会話は大変興味深い。Robin は紳士に向かって、“Thanks to you, and to my other friends, I have at last met my kinsman” (230) とお礼を述べるが、これはとても Robin の本心とは思えず、明らかに皮肉が込められている。²⁵ いくら彼が老人、宿の亭主、夜の女、夜警などの笑いに感染し、自ら笑いを発したにしても、親戚の Molineux を、そして何よりも彼自身をなぶり者にした彼らのことを、本気で “friends” と呼べるはずがない。ましてや、Molineux とこのように悲惨な形で再会できたことに感謝するいわれはない。Robin はこれまで言葉を額面通りの意味にしか用いず、またほとんど額面通りにしか相手の言葉を受け取らなかった。つまり言葉に含まれる多面的な意味やニュアンスを理解できずにいた。そんな Robin からすると、格段の進歩が認められる。このことは彼が物事の二面性を体得し、それを駆使する術を覚えたことの証左となろう。紳士に、“You have then adopted a new subject of inquiry?” と尋ねられて、Robin は、“Why, yes, Sir” (230) と答えているが、まだ茫然自失としている彼に、“a new subject of inquiry” など考えつくはずもなく、口から出まかせとしか思えない。また彼は、町を去る理由として、“he [Molineux] will scarce desire to see my face again.” (231) と述べている。Molineux が Robin に会いたがらぬのは、おそらく事実であろう。しかし本当は、Molineux と会いたくないのは Robin の方である。いや、会いたくないというよりは、会う必要がなくなったと言った方がよいかもしれない。だが本心をそのまま口に出しては、Molineux に失礼にあたるし、また紳士にも悪い印象を与えかねない。そこで Robin は、Molineux の気持ちを思い遣るふりをして、彼と会わぬ口実としたのである。彼は巧みに自分の気持ちを相手に仮託している。

故郷の田舎に帰りたいので、渡し場までの道を教えてほしいと頼む Robin に対して、紳士は、“No, my good friend Robin, not to-night, at least Some few days hence, if you continue to wish it, I will speed you on your journey. Or, if you prefer to remain with us, perhaps, as you are a shrewd youth, you may rise in the world, without the help of your kinsman, Major Molineux.” (231) と返事をする。ここで紳士は、性急に判断を下すことを Robin に戒めている。多様な価値観の交ざり合うこの世の中で、的確に物事の本質を見抜くことは至難の業である。重大な決定を下すにあたっては、いくらじっくり考えても、考え過ぎるということはない。そこで事を急ぐあまり、判断を誤ってしまえば、後で取り返しがつかなくなる。この判断停止の必要性については、それ以前にも紳士は同様の注意を Robin に与えている。教会の石段で Molineux を待っている Robin が、近づく行列の騒音をお祭り騒ぎと勘違いして、仲間に加わろうとした時、紳士は彼を引き留め、Molineux の到着をその場で待ち受けるよう諭す。やみくもに行動に移ることなく、事態をしかと見極めるまでじっと待つことの大切さを教える紳士の言葉は、物語の結末の忠告と呼応する。判断を留保したまま、待ち続けることは、確かにつらい。たとえ結果が凶と出ようとも、思い切りよく決断を下してしまえば、それで楽になれる。だが一か八かの賭けに出ることが勇気ではなく、どっちつかずの状態はどっちつかずのままに、自ずと真実が見えてくるまでひたすら耐えることが真の勇気である。

この結末の意味するものをどう理解するかは、“My Kinsman, Major Molineux” という作品を解釈するにあたって、重要なポイントとなる。評論家の見解も種々割れている。果たして Robin は人間的成長を遂げたのか否か。また彼は紳士の忠告を受け入れて、町に留まるのか、それとも田舎の父の家へと帰って行くのか。第一の疑問に対しては、Robin は確実に子供から大人に成長したとする意見がある一方で、逆に彼は町の悪に染まり、墮落したとの見方もある。²⁶ また墮落したとは言えないまでも、町を訪れる以前と本質的な違いは認められず、何ら成長の跡を留めていないとする論者もある。²⁷ この点に関して、私としては、やはり Robin はある意味での成長に至ったと考えたい。彼は一夜の経験を通して、世の中の二面的価値観というモラルを身をもって学んだ。その結果、彼は物事を単純な目で眺め、純粹に信じる無垢な気持を失ってしまったという意味では、それは一種の墮落かもしれない。だが所詮、成長と墮落は表裏一体をなし、これまた二面性を備えている。両者の間に明確な線引きをすることは極めて困難である。それならば、世の中の真実の姿を知るところを墮落と言っていたはずにも嘆くよりも、むしろ成長として捉え、そこに積極的な意義を見いだした方がはるかに建設的ではあるまいか。

第二の疑問については、Robin はこのまま町に留まるとする説が圧倒的に優勢である。だが一口に町に留まるといっても、その意味するところは様ではない。Robin 成長論者は、紳士の言葉そのままに、“rise in the world, without the help of . . . Major Molineux” するため、Robin は町に残るとして、ほぼ意見の一致を見ている。²⁸ ところが Carl Dennis の解釈では、Robin は町に留まるにしても、それは自ら望んでのことではなく、生まれ故郷の価値観を裏切った彼には、もはや帰るべき故郷がないため、そうするに過ぎないとしている。²⁹ また Arthur T. Broes は、一夜の経験により町の悪に染まった Robin は、同じ悪の仲間として、町の住人の間で暮らすことになるかと論じている。³⁰ その一方で、少数ながらも、Robin が故郷の田舎へ帰る可能性を示唆する論者もいる。だがそれは何も、町の価値観に失望した Robin が、田舎に新たな価値観を見だし、その実現のため、勇躍故郷に帰って行くということではない。Robin 帰郷論者は、いずれも Robin 非成長論者であることから察せられる通り、町での経験から何ら得るところのなかった Robin は、町の生活に恐れをなして、田舎に逃げ帰って行くのである。町の暮らしに適應できない彼には、田舎しか残されていない。³¹

Robin 成長論者をもって自らを任ずる私としては、当然 Robin は町に残るとせねばならぬところであるが、その点については、彼らの意見に全面的には同調しかねる。Robin は町に留まるとの主張にもかかわらず、彼らの多くはその根拠を示していない。物語の展開の自然な帰結として、人間的成長を遂げた Robin が町に残るのは当然で、わざわざ論ずるまでもないと考えているのであろうか。なるほど、Robin の成長の意味が、“rise in the world without the help of . . . Major Molineux” することにあるとしたら、彼が町で暮らすのは当然であろう。なぜなら田舎で出世する機会は、町ほどに多くはないからである。だが、私の考える Robin の成長の意味とは、彼が二面的価値観というモラルを学ぶことにある。ひとたびこのモラルを身につけてしまえば、それを発揮する場は町に限る必要はない。町であろうが、田舎であろうが、その効力に違いはなく、いずれにも適用可能である。

また一方で、Robin 帰郷論にも賛成しかねる点がある。町での経験を通して、Robin が悪の存在を知り、恐れをなして安全な田舎へ逃げ出したとするなら、確かに筋は通っている。丁度、“Young Goodman Brown” の主人公が、森での一夜の経験の末、この世における恐るべき悪の遍在に目を開かされ、以後自分一人の殻に閉じこもって、世間との交わりを絶ったとする内容に符合する。だが私の考えでは、Brown と Robin では学んだモラルが異なっている。Brown が学んだのは、善の仮面の背後に隠された悪の存在である。それに対して、Robin が学んだのは、悪と善との混淆である。悪と善が同時に存在するという点においては、両者に違いはない。しかし Brown にとっては、悪が本質で、善は仮構であり、悪は善に比して圧

倒的な優勢を保っている。Robin の場合は、どちらが主で、どちらが従という関係にはない。もしも Robin が、森で Brown の絶叫するように、“‘There is no good on earth; and sin is but a name. Come, devil! for to thee is this world given.’” との認識に達したとするならば、彼が田舎に引きこもり、孤独のうちに陰鬱な人生を終えたとしてもおかしくはない。³² だが、悪に混じって善も存在することが分かっている Robin にすれば、Brown のように人生に絶望する必要はない。Robin の新たなモラルによれば、田舎の故郷は一面的に善なるものではなく、従って彼が田舎に帰る必然性はない。町についても同じことが言える。町は悪一色に染まっているわけでもなければ、善に満ち満ちているわけでもない。よって彼はそこから逃げ出す必要もない代わりに、そこに敢えて留まる理由もない。町にせよ、田舎にせよ、それぞれの長所と短所があり、いずれに暮らそうと変わりはない。Robin が二面的価値観を獲得したからには、彼がどこで暮らそうが、Hawthorne にはどうでもよかったのではあるまいか。いや、作者の Hawthorne 自身がそれに限定を加えることは、却って Robin が学んだモラルと矛盾することになりはしまい。作者がどちらとも明言していないことには、そのような含みがあるとも考えられる。とすれば、Robin はボストンの町でも、故郷の田舎でもない、全く別の第三の土地に新天地を求めようとも、一向に差し支えないことにもなろう。

注

1. Q. D. Leavis, “Hawthorne as Poet,” *SR*, 59 (1951), 179-205.

2. Roy Harvey Pearce, “Hawthorne and the Sense of the Past or, the Immortality of Major Molineux,” *ELH*, 21 (1954), 327-49; John Russell, “Allegory and ‘My Kinsman, Major Molineux,’” *NEQ*, 40 (1967), 432-40; Julian Smith, “Historical Ambiguity in ‘My Kinsman, Major Molineux,’” *ELN*, 8 (1970), 115-20; Robert C. Grayson, “The New England Sources of ‘My Kinsman, Major Molineux,’” *AL*, 54 (1982), 545-59; T. Walter Herbert, Jr., “Doing Cultural Work: ‘My Kinsman, Major Molineux’ and the Construction of the Self-Made Man,” *SN*, 23 (1991), 20-27.

3. Daniel G. Hoffman, “Yankee Bumpkin and Scapegoat King,” *SR*, 69 (1961), 48-60; Peter Shaw, “Fathers, Sons, and the Ambiguities of Revolution in ‘My Kinsman, Major Molineux,’” *NEQ*, 49 (1976), 559-76; Hazel Cohen, “The Rupture of Relations: Revolution and Romance in Hawthorne’s ‘My Kinsman, Major Molineux,’” *English Studies in Africa*, 29 (1986), 19-30.

4. Simon O. Lesser, “The Image of the Father: A Reading of ‘My Kinsman, Major Molineux’ and ‘I Want to Know Why,’” *PR*, 22 (1955), 372-90; Roy R. Male, *Hawthorne’s Tragic Vision* (Austin: University of Texas Press, 1957), pp. 48-53; Louis Paul, “A Psychoanalytic Reading of Hawthorne’s ‘Major Molineux’: The Father Manqué and the Protégé Manqué,” *The American Imago*, 18 (1961), 279-88; Frederick Crews, *The Sins of the Fathers: Hawthorne’s Psychological Themes* (New York: Oxford University Press, 1966), pp. 72-79; Dennis Brown, “Literature and Existential Psychoanalysis: ‘My Kinsman, Major Molineux’ and ‘Young Goodman Brown,’” *Canadian Review of American Studies*, 4 (1972), 65-73; Robert E. Abrams, “The Psychology of Cognition in ‘My Kinsman, Major Molineux,’” *PQ*, 58 (1979), 336-47.

5. Hyatt H. Waggoner, *Hawthorne: A Critical Study*, rev. ed. (Cambridge: Harvard University Press, 1963), pp. 56-64; Seymour L. Gross, “Hawthorne’s ‘My Kinsman, Major Molineux’: History as Moral Adventure,” *NCF*, 12 (1957), 97-109; Arthur T. Broes, “Journey into Moral Darkness: ‘My Kinsman, Major Molineux’ as Allegory,” *NCF*, 19 (1964), 171-84; Alexander W. Allison, “The Literary Contexts of ‘My Kinsman, Major Molineux,’” *NCF*, 23 (1968), 304-11; Carl Dennis, “How to

Live in Hell: The Bleak Vision of Hawthorne's 'My Kinsman, Major Molineux,' " *University Review*, 37 (1971), 250-58; A. B. England, "Robin Molineux and the Young Ben Franklin: A Reconsideration," *JAS*, 6 (1971), 181-88; Sheldon W. Liebman, "Robin's Conversion: The Design of 'My Kinsman, Major Molineux,'" *SSF*, 8 (1971), 443-57; Roger P. Wallins, "Robin and the Narrator in 'My Kinsman, Major Molineux,'" *SSF*, 12 (1974), 173-79; J. C. Nitzsche, "House Symbolism in Hawthorne's 'My Kinsman, Major Molineux,'" *ATQ*, 38 (1978), 167-75.

6. Waggoner, *Hawthorne*, p. 63. Gross, "Hawthorne's 'My Kinsman, Major Molineux,'" も同様に、"As the source studies of Hawthorne's historical tales abundantly illustrate, *history as history* had but very little meaning for Hawthorne artistically." (99)と述べている。

7. Waggoner, *Hawthorne*, p. 62.

8. Gross, "Hawthorne's 'My Kinsman, Major Molineux,'" 106.

9. Wallins, "Robin and the Narrator in 'My Kinsman, Major Molineux,'" 179.

10. Hoffman, "Yankee Bumpkin and Scapegoat King," 49.

11. England, "Robin Molineux and the Young Ben Franklin," 188; Nitzsche, "House Symbolism in Hawthorne's 'My Kinsman, Major Molineux,'" 174.

12. Broes, "Journey into Moral Darkness," 172; Allison, "The Literary Contexts of 'My Kinsman, Major Molineux,'" 310; Dennis, "How to Live in Hell," 251; Liebman, "Robin's Conversion," 449.

13. Nathaniel Hawthorne, *The Snow-Image and Uncollected Tales*, Vol. XI of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, ed. William Charvat et al. (Columbus: Ohio State University Press, 1974), p. 226. 以下この作品からの引用はすべてこの版により、括弧内に該当頁数のみ記す。

14. Mario L. D'Avanzo, "The Literary Sources of 'My Kinsman, Major Molineux': Shakespeare, Coleridge, Milton," *SSF*, 10 (1972), 124; Shaw, "Fathers, Sons, and the Ambiguities of Revolution in 'My Kinsman, Major Molineux,'" 569; Grayson, "The New England Sources of 'My Kinsman, Major Molineux,'" 547.

15. Lesser, "The Image of the Father," 379.

16. Hawthorne, *The Scarlet Letter*, Vol. I of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, ed. William Charvat et al. (Columbus: Ohio State University Press, 1962), p. 216.

17. Male, *Hawthorne's Tragic Vision*, p. 50; Gross, "Hawthorne's 'My Kinsman, Major Molineux,'" 107.

18. William Bysshe Stein, "Teaching Hawthorne's 'My Kinsman, Major Molineux,'" *CE*, 20 (1958), 85.

19. Waggoner, *Hawthorne*, p. 61.

20. 本文中に述べた通り、多くの評論家は紳士を善意のガイド役としているが、Broes, "Journey into Moral Darkness," 181, と D'Avanzo, "The Literary Sources of 'My Kinsman, Major Molineux,'" 130, は、それぞれ紳士を破滅の化身と悪魔とに擬している。

21. Gross, "Hawthorne's 'My Kinsman, Major Molineux,'" は、"Robin's dark wanderings through shadowed streets are periodically lit up by flashes of light which he refuses to understand, until where 'the torches blazed the brightest' and 'the moon shone out like day,' there was a reality too bright to

be misunderstood.”(106)と述べている。

22. Hawthorne, *The Scarlet Letter*, p. 35.

23. Hawthorne, *Twice-Told Tales*, Vol. IX of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, ed. William Charvat et al. (Columbus: Ohio State University Press, 1974), p. 5.

24. Smith, “Historical Ambiguity in ‘My Kinsman, Major Molineux,’” 115-20.

25. Broes, “Journey into Moral Darkness,” は、Robin の “friends” という言葉を字義通りに受け取り、この呼びかけにより、“Robin also acknowledges a similar kinship with the sinners of this town.” (183) と解釈している。

26. Robin 成長派としては、Pearce, “Hawthorne and the Sense of the Past or, the Immortality of Major Molineux”; Waggoner, *Hawthorne*; Lesser, “The Image of the Father”; Gross, “Hawthorne’s ‘My Kinsman, Major Molineux’”; Stein, “Teaching Hawthorne’s ‘My Kinsman, Major Molineux’”; Hoffman, “Yankee Bumpkin and Scapegoat King”; Smith, “Coming of Age in America: Young Ben Franklin and Robin Molineux,” *AQ*, 17 (1965), 550-58; Crews, *The Sins of the Fathers*; Wallins, “Robin and the Narrator in ‘My Kinsman, Major Molineux,’” などが挙げられる。一方、Broes, “Journey into Moral Darkness”; Dennis, “How to Live in Hell”; D’Avanzo, “The Literary Sources of ‘My Kinsman, Major Molineux,’” などは、Robin 墮落説を唱えている。

27. Paul, “A Psychoanalytic Reading of Hawthorne’s ‘Major Molineux,’” と Liebman, “Robin’s Conversion,” は Robin 非成長説の主張者である。

28. Pearce, “Hawthorne and the Sense of the Past or, the Immortality of Major Molineux”; Gross, “Hawthorne’s ‘My Kinsman, Major Molineux’”; Stein, “Teaching Hawthorne’s ‘My Kinsman, Major Molineux’”; Smith, “Coming of Age in America”; Crews, *The Sins of the Fathers*; Wallins, “Robin and the Narrator in ‘My Kinsman, Major Molineux,’” などが、Robin は成長の結果、町で自らの人生を切り開いていくと主張している。

29. Dennis, “How to Live in Hell,” 254.

30. Broes, “Journey into Moral Darkness,” 183.

31. Paul, “A Psychoanalytic Reading of Hawthorne’s ‘Major Molineux,’” 及び Liebman, “Robin’s Conversion,” 参照。

32. Hawthorne, *Mosses from an Old Manse*, Vol. X of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, ed. William Charvat et al. (Columbus: Ohio State University Press, 1974), p. 83.